

ビル・レディングス『廃墟のなかの大学』の衝撃

2007/11/01 報告者：西山雄二（東京大学）

引用後の丸括弧内の数字は、Bill Readings, *The University in Ruins* (Harvard University Press, 1996)
およびその日本語訳（青木健・斎藤信平訳、法政大学出版局、2000年）の頁数をそれぞれ示す。

レディングス『廃墟のなかの大学』の特徴

- ・歴史の幅広い文脈のなかに哲学と大学の関係を位置づける野心的試み。
近代の大学からグローバル時代の大学（ポスト歴史的大学）への移行。
大学の歴史と理念の相互性を浮き彫りにする。
- ・「文化」という観点から大学の変容を読み解き、その変化の中心として人文学（とくに哲学、文学、カルチュラル・スタディーズ）を考察する。
- ・「エクセレンス」という内実なき概念をグローバル時代の大学を分析するための切り口にするものの有効性。
- ・日本語翻訳の問題：固有名や著作名の不適切さ。副詞句の位置の不正確さ。指示代名詞の訳出の不親切さ、など。

第1章 序論

本書の目的

「むしろ私としては、大学が制度として果たすべき機能の今日の変化について構造的な診断を下すことで、大学が一つの機関として担うより広い社会的役割がいまやきわめて混乱しているということを論じたい。社会のなかで大学の位置はどのようなものか、あるいは、その社会の本質とは何かということとはもはや明確ではない。大学という学術機関の形が変化していることを知識人が見過ごすことはできないのである。」(2/2)

大学という学術機関

≠他の学術的機関：、カルチャー・センター、ビジネス・スクール、語学学校、専門学校……。

→制度的な違いではなく、教育（法）上の違いはあるのか。

「アメリカ化」≡グローバリゼーション

「国家的帝国主義の過程を指すよりも、社会生活のあらゆる行動局面における決定因としての国家的アイデンティティという概念の代わりに、金銭的結びつきというルールを全般的に課すこと。」(3/3)

→「国民文化という使命の衰退」「国民国家の理念からの大学の分離」(3/3)

「国民国家から高等教育を分離することについての著作」(4/4)

「国民国家との直接的結びつきから大学を切り離すある種のアメリカ化に光を当てる。」(4/4)

☞ アメリカ化の強力な政治的・経済的潮流によって、国民国家から切り離されつつ、もっとも躍進しているのはやはりアメリカの大学。アメリカ化の影響を被るアメリカ以外の地域では事情は異なる。むしろ、アメリカ化に対抗するために大学と国民国家的制度の結びつきは強化される傾向もある。

大学と近代

大学のポストモダン？ Cf. リオタール『ポストモダンの条件』

大学が近代のそれよりもさらに革新的で批判的であるかのように聞こえる。

≠「ポスト歴史的」大学

近代における国民国家と大学の同時的な創設という使命がもはや無効となった時代

近代の大学：「フンボルトがベルリン大学において創始し、西洋では第二次大戦後の高等教育の拡大に

際してもなお貢献したドイツ型モデル」(7/8)

アラン・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉』(1987年):人文学への貴族主義・エリート的郷愁
☞ オイル・ショック以後の1980年代と1990年代以降の大学(さらにいえば、教育)をめぐる状況の変化。各国によって異なる経済的・社会的文脈。

国民文化の形成拠点から官僚的企業体へ

国家のイデオロギー的部門から相対的に自律的な消費者中心の官僚的企業体への変容(11-12/16)

「国民文化」の開発から「人的資源」の開発へ

フンボルトによる教育と研究の一体化構造の継承

研究を通じて文化についての知識を生み出し、教育において学習過程として文化を教える

→研究を通じて仕事を生み出し、教育において職業訓練を提供する

第2章 エクセレンスの概念

対象も内実もない概念

「エクセレンスの必要性に私たちみんなが同意している。というのも、外的な指示対象や本質的内容をもたないという意味で、エクセレンスがイデオロギーではないからである。」(23/31)

「エクセレンスという概念の普遍的適用性は、この概念の中味のない状態に直接関係している。」(23/31)

空疎な包括性

「エクセレンスを引き合いに出すことで、学問分野を超えた価値の問題という課題を克服できる。」(23/32)

エクセレントな船、エクセレントな飛行機…異なる対象を比較するための便利で空虚な概念

学生の成績、講義のサイズ、教員の質、財政状態、図書館の蔵書、卒業生の社会的声価などがエクセレンスの対象…大学の駐車場のエクセレンスも。

消費者主義の論理の浸透

「エクセレンスは、一つの完全に閉じられた体系の諸要素のなかでの相対的ランキングのための一つの手段」(27/37)

学生を考えることを欲する人間ではなく、完全に消費者として位置づける仕組み

独創性の競り上げを可能とするエクセレンス概念

「要点は、エクセレンスが何かを誰も知らないということではなくて、エクセレンスが何なのかすべての人が自分なりの考えをもっているということである。」(32-33/45)

「一方では、自分たちの大学がユニークな教育機関であるところぞって主張している。他方で、そのユニークさをまったく同じように説明している。」(12/16)

時代状況とエクセレンス

「大学は知識におけるエクセレンスを生み出し、こうして、やすやすとグローバル資本と超国家的な政治の回路へと結びつくだろう。エクセレンスの概念には文化的内容がないからである。」(38/52)

「エクセレンスに訴えることは、大学の理念がもはや存在しない、あるいは、大学の理念がいまやすべての内容を失ってしまったという事実を示している。」(39/54)

第3章 国民国家の衰退

本書の目的

①「文化という概念の庇護の下で、機関としての大学の統合がどのように国民国家の問題と結びつくよ

うになったのかを突き止めること」

②「エクセレンスの言説に代わるものがあるのかどうかを問うこと」

→「大学が、一度その文化的使命を奪われてしまった後で、一極的な資本主義制度の官僚的機関である以外の何でありうるのかと問うこと」(46/63)

第4章 理性の範囲内の大学

大学モデルの推移

- ① カント的な理性の拠点としての大学
- ② フンボルト的な国民文化の形成拠点としての大学：近代的大学の模範・ベルリン大学
- ③ 1990年代以降、グローバル化の趨勢によって技術官僚的なエクセレンスを競い合う大学
エクセレンス=大学という理念の幻影

学長の形象 (54/55/74-75)

- ① カント：理性のみを基盤として、学部間の対立に決定的判断を下すという純粹に学問的な機能
- ② 国民文化としての大学：全般的な文化志向の全学問的理想を体現する大学の象徴。「同輩中の首位」
- ③ エクセレンスの大学：官僚的管理者
何らかの意見を公表するわけでもなければ、いかなる判断を下すわけでもない。

カント：学問の自由を大学の自由として定式化した最初の哲学者

理性を基盤として近代の大学を確立。近代的意味において、大学に普遍性を付与する。

国家権力→統制→神学・法学・医学 / 哲学：理性による内在的原理

上級学部（神学・法学・医学）は人間の永遠の幸せ、その市民的な幸せ、その身体的な幸せを実現する。

下級学部（哲学）は、自律的な理性原理にもとづいて、上級学部に対して合法的な争いをおこなう。

→国家に対する大学の自律性の問い。大学の適切な内的構成の問い。

第5章 大学と、文化の理念

19世紀の大学の構想⇔21世紀の大学の構想

ドイツ観念論者：フンボルト、シラー、シュライエルマッハー、フィヒテ…

教育と研究の両方を評価する必要性、純粹な研究の間接的な効用

知識とその社会的機能の分析を明確化し組織化 民族国家と理性的国家、哲学的文化の一体化

大学の特殊性は研究と教育の不可分の統一性（文化）にある。≠高校、学会

文化の二重の分節化

①アイデンティティ：研究の対象であるすべての知識の統一性

②発達のプロセス、人格の形成のプロセス

文化は教育と研究、プロセスと所産、歴史と理性、文献学と批評、歴史的学識と美的体験、機関と個人といったものの統合に名前を付与する。

文化を形成する大学：近代の機関としての大学の姿と国民国家に対する大学の関係を規定した。

☞ 後進国ドイツ：統一国家を建設するにあたって、国家が社会の意味の総体としての文化と一致するという考え。「文化国家」という理念を掲げ、その中心が大学。哲学部が他の三学部並に格上げされ、後に人文学部、理学部へと分化。

・19世紀、アメリカからの留学生がドイツ・モデルを故郷に伝える。

ジョンズ・ホプキンス大学、シカゴ大学など→研究志向の新しい大学、専門的研究の導入、大学院制度の形成。アメリカの従来のリベラルアーツ教育が変質し、各学部を基本単位として再編。

・19世紀後半の産業化→専門分野の多様化。

・20世紀、第一次世界大戦後に高等教育の大衆化が開始

・1960年代、グローバルな経済発展とともに、高等教育の大衆化が爆発。

陶冶 Bildung

大学のなかに具現化された文化の原理は、主体の精神的道徳的訓練（教化）と客体的科学の前進（文化的知識）を融合させる。（フンボルト）
大学は国家の従順な使用人を生産するのではなく、学識を自由に自律的に習得する主体を育成する。

☞ フンボルト、フィヒテの教師論→陶冶

- ・教師は高度な道徳性を備え、学生に人格的影響を与える。
- ・講義において、知的探求のすばらしさを学生に伝える。
- ・学生もまた真実の探求者。孤独の中で自主的に学習。

第6章 文芸文化

19-20世紀の大学をめぐる文化的アイデンティティの変容

とりわけ英米の大学で、文化は哲学的なものから文学的のものになる。

国民国家がその起源を見出す実例として、民族的本質と理性的国家を統一するものとして引き合いに出されるシェイクスピア。

≡ドイツ観念論者にとっての古代ギリシア

第7章 文化闘争とカルチュラル・スタディーズ

女性学、レズビアンおよびゲイ研究、アフリカ系アメリカ人研究、カルチュラル・スタディーズ…。

大学と国民国家のあいだのアナロジーを機能させ、両者を統合してきた「(国民)文化」の終焉

カルスタという総称的商標：マルクス主義、精神分析、記号論の混合

カルスタ：本質的にもっともアカデミックな学際的動向。近代の大学の根拠に対する問題提起そのもの。

第8章 ポスト歴史的大学

「私たちはポスト歴史的大学の特徴である脱指示化をうまく利用すべきだ。つまり、私たちは、理念をもたない大学、統一や普遍性という語源的混同から名称を得ていない大学を目指す意味を考えるべきだ。」(122/167)

独自の学問上の統一、理想としての究極的普遍性、陶冶によるその伝播といった従来の大学モデル

今日、大学について考える多くの人々がとる方向性

- ・規格化された共同体と社会的機能というフンボルト的理念へのノスタルジックな回帰
 - ・大学は法人的アイデンティティを受け入れ、より生産的で効率的であるべきとする官僚的要請を受諾
- 研究、教育、管理運営→「管理運営」が「研究、教育」を包括している。

第9章 研究の時節——1968年

陶冶という物語が不確実性という名のもとに学生たちに拒絶された出来事。

第10章 教育の現場

教育の問題を論じる際の三つの傾向 (151-152/205-207)

- ① 管理者が教育を知の生産と配分がかかった費用と資本の代価となるプロセスとして理解しようとする。
 - ② 教授者が学生という学ぶ主体を訓練する権限を声高に要求する。
 - ③ 学生が、大学からの制度や教育実践を押し付けられることに不満を抱く。
- 管理者、教授者、学生にとって教育はどのようにあるべきかという総合的な視点
→教育プロセスの中心を求めるやり方。教育実践に対するメタ主体的視点、メタ評価者の視点の追及。

レディングスの反論

教育実践における特権的な視点の可能性を拒否すること

人間の本来的な自律性の教化や啓発、あるいは支配的主体の育成などとは異なる教育実践の模索

「私の目的は、教授と学習が科学的な知識の伝達手段ではなく、義務の場、倫理的実践の場と言い換える反モダニストの立場をとることである。したがって、教育実践は、真理の基準に対するよりも、むしろ公正さの問題に対して責任をもつものとなる。」(154/209)

教育法に関する三つのデマゴギー

- ① 教授者は絶対的な権威／学生は知識の伝達を受け入れる容器
 - ② 教師と学生のあいだにはいかなる違いもなく、学ぶ—学ばれるという非対称的な関係はない
 - ③ 教育をテクノクラートの育成と訓練に還元すること
- 自律性への志向：教育の最終目標＝学生がある種の模倣的アイデンティティを獲得すること

レディングスの主張

国民国家の衰退とともに、大学は開かれた、柔軟性のあるシステムとなった。

空疎なエクセレンスの理念を空疎な思考の名称に置き換えるように努めるべきだ。

エクセレンス≠思考

- ①思考は理念という装いをしない。②思考は解答ではなく問いとして機能する。

第11章 廃墟に住んで

第12章 不同意の共同体

大学が提示する社会的つながりのモデル

中世の大学における教師と学生とのギルド的モデル

近代の大学における自律した諸個人の社会契約的モデル

→人間の能力を有する者同士の透明なコミュニケーションという原理を前提

不同意の共同体 (the community of dissensus)

特異な各人が、さまざまな形で発話者と聞き手の位置を占めることで、他者への義務の網の目に巻き込まれること

自己正当化と自律性をもつ社会を目指す政治的同意の地平≠不同意の他律的地平

思考はコンセンサスを前提とすることなく、異質なものを受容する。

大学をめぐる信の問い

「教師と学生が直面している問題は、このように何を信じるべきかの問題ではなく、学術機関に対してどんな分析を加えれば、信念が価値あるものになるかという問題である。エクセレンスの観点からは、いったいどんな信念が価値評価の糧となりえないのだろうか。」(192/259)

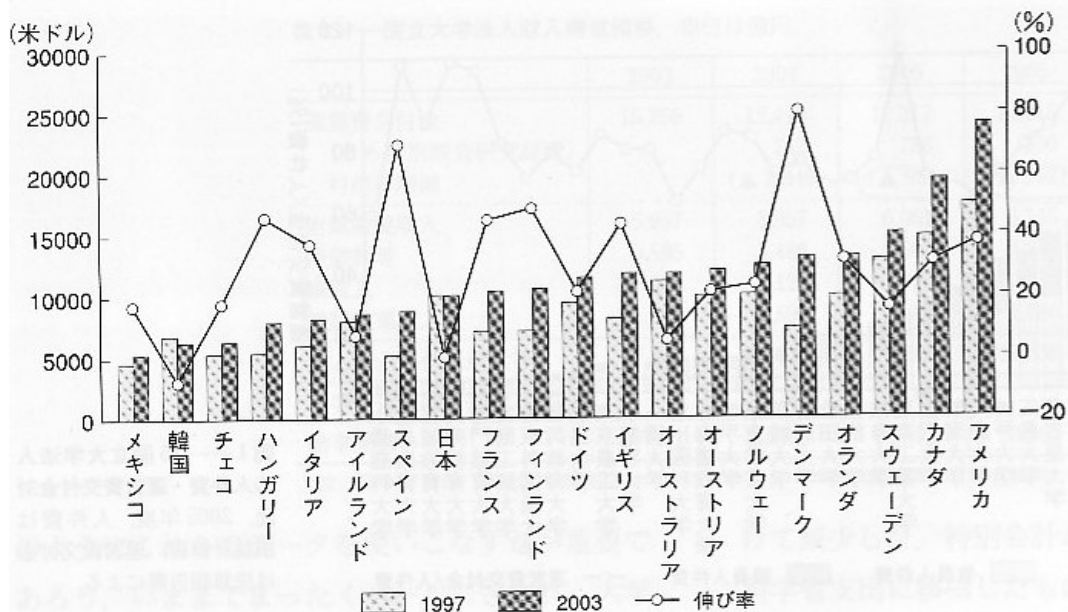
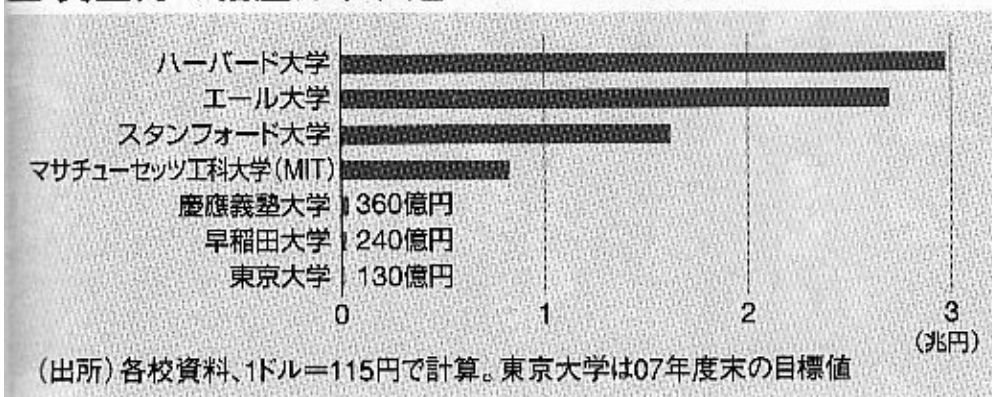


図2—高等教育機関在学学生1人当たり教育支出(1997年と2003年)。OECD: Education at a Glance 2000, 2003による。全高等教育機関、研究開発費含む。

■ 資金力の格差はケタ違い —日米主要大学の基金規模—



■ 公的研究費の日米大学比較

